

# ダニー・ザ・ドッグ

2005(平成17)年7月3日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝ルイ・レテリエ／脚本＝リュック・ベッソン／出演＝ジェット・リー／モーガン・フリーマン／ボブ・ホスキンス／ケリー・コンドン（アスミック・エース配給／2004年フランス・アメリカ映画／103分）

……監督や脚本家にとってアクション映画に人間的側面をもち込みたいと考えるのは、やまやまだろうが、そうすると失敗作になることも……？ この映画の脚本を書いたリュック・ベッソンは明らかにそれを狙い、ジェット・リーもそれを望んだ結果、その融合が大成功……？ 常に首輪をつけ、主人の命令のみによって闘争マシーンとして動く犬同然というキャラクターは寂しいが、そうだからこそ面白い人間ドラマが……？ なおこの映画の中で流れるモーツァルトの『ピアノソナタ11番』にも是非注目を！

## アクションと人間ドラマの融合

「ホリエモン騒動」が世間の注目を集めた今年4月頃には、「放送とインターネット事業との融合」が大きなテーマとして議論されたが、映画界においてはアクションと人間ドラマとの融合が昔からの大テーマ……？

アクションに徹底した映画や人間ドラマに徹底した映画は当然わかりやすいから、前者はとことん楽しく、後者はとことん観客の涙を求めるという製作意図が明確になる。

しかし、アクションと人間ドラマの融合を本気で目指すと、うまくいけばいいものの、失敗すれば「二兎を追うものは一兎をも得ず」という結果に……。監督や脚本家にとってこれはチャレンジしてみたい永遠のテーマなのだろうが、実際にそんな映画をつくるのはかなり難しいこと……？

## リュック・ベッソンとジェット・リーのチャレンジの成否は？

そんな困難なテーマにチャレンジしたのは、まず第1にこの映画の脚本を書いたリュック・ベッソン。彼が監督した最近の歴史絵巻的大作は、『ジャンヌ・ダルク』(99年)だが、古くは『ニキータ』(90年)や『レオン』(94年)などの名作がずらり。さらに『TAXi』(97年)、『フィフス・エレメント』(97年)では、リュック・ベッソンが描く近未来社会の面白さがタップリだった。こんなリュック・ベッソンが、若手のルイ・レテリエに監督の座を譲り、自らは脚本家としてアクションと人間ドラマの融合にチャレンジしたのがこの映画だ。

第2に同じチャレンジをしたのが、数多くの中国・香港男優の中で見事に『HERO (英雄)』(02年)の主役の座を射止めたジェット・リー。その最大のポイントは、アクション俳優としての並はずれた能力だったが、ジェット・リーもやはり、アクションと人間ドラマの融合を目指していたらしい。パンフレットには「アクションスターとしてのジレンマを感じていた」と書かれていたほどだ。本当にそう感じていたかどうかはともかく、このジェット・リーが、首輪をまいて主人の命令にのみ忠実に働く、10歳程度の知能しか持たない「ダニー・ザ・ドッグ」というキャラクターに挑戦したのは、大きな冒険だったはず……。

しかして、この両者のチャレンジの成否は……？

## ダニー・ザ・ドッグの由来は？

5歳のときに母親と別れたダニー（ジェット・リー）にとって、自分を育ててくれたバート（ボブ・ホスキンス）は、いわば父親同然の存在。しかしこの「父親」は、引きとった息子の首に首輪をかけて、闘うマシンとして育てただけ。当然、何の教育も施さず、ロクな食糧も与えず、まさに首輪に象徴されるように、犬、しかも闘犬と同じように育てただけ。その結果、この「ダニー・ザ・ドッグ」は、飼い主であり父親であるバートが首輪をはずして「やっつけろ！」と命令すれば、条件反射的にそれに従うだけの存在となっていた。しかし、本当に人間をこんな風に闘犬として育てることは可能なのだろうか？ それに対して、バートは自慢気に、「母親から、子供は小さい時の教育が大切なんだと教えてもら

った」と答えるが、ホントにそれだけでこんな「ダニー・ザ・ドッグ」が生まれるの……？

## 借金の取り立て、あれこれ

バートの仕事は「高利貸し」らしいが、なぜか借金の取り立てにはこのダニーを使うことが多い。銀行による金融と高利貸しによる金融の、どこがどう違うのかについては諸説あるが(?)、どちらも難しいのは借金の取り立て。「失われた10年」を生み出した銀行の「不良債権」問題は、いわば銀行が借金の取り立てをきちんとできなかったために生じたもの。金融と借金の取り立ての実態を描いた有名な作品が『ナニワ金融道』。そこで描かれる血も涙もない借金の取り立ての姿はいかにも大阪名物(?)だが、この『ダニー・ザ・ドッグ』で描かれる借金の取り立ては、最初から暴力沙汰になることを見込んだエゲツないもので、『ナニワ金融道』の数段上をいくもの……？

## もう1人の父親像は？

バートが「ダニー・ザ・ドッグ」の育ての父親なら、人間としてのダニーの父親が盲目のピアノの調律師であるサム(モーガン・フリーマン)。「目が見えない」ということは、現実の話としては盲目の黒人歌手レイ・チャールズの一生を感動的に描いた、あの『Ray / レイ』(04年)を観ても、また架空の話としては勝新の代表作である『座頭市』シリーズなどを観ても必ずしも大きなハンディキャップにならないことがよくわかる。すなわち、人間においては1つの感覚にハンディキャップがある場合は往々にして、別の感覚が並の人間の水準を大きく超え、研ぎ澄まされる可能性があるということだ。このサムにおいては、それは鋭い聴覚となって現れた。その鋭い聴覚によってサムは、ダニーの声やその雰囲気を感じとり、ダニーの持つ深い悲しみを感覚的に理解することができた。そんなサムだったから、ダニーを家族同様に受け入れることに……。

闘いに明け暮れていたダニーの知能は10歳程度。そんなダニーに対してサムは、かわいい義理の娘であるヴィクトリア(ケリー・コンドン)と同様に接したから、ダニーもサムを人間としての父親と感じたのは当然……。

さてダニーは、バートとその追手が迫ってくる中、どんな決断のもとに自分の父親を選択するのだろうか……？

## 迫力あるアクションシーンに興奮！

最近観た映画では『シンデレラマン』(05年)でのボクシングの試合に大感激したが、この映画ではカンフーを中心とした真面目な(?)アクションシーンがテンコ盛り！ 借金の「取り立て屋」として乗り込んでいく父親(?)のバートと常に同行し、首輪を外されて「やっつけろ！」と命令されれば、条件反射的に相手を叩きのめしていくことは、ダニーにとっては所詮、素人相手の攻防だからやっつけて当たり前……。面白いのは、古代ローマのコロッセオを模したようなヤミの格闘技場における生命をかけた文字どおりのデスマッチ戦。これは面白いヨ……。ダニーの絶対的な強さを知っているバートは、こんないい商売があることを教えられ、そこでボロ儲けができたことに有頂天……。しかし、いいことはいつまでも続かないもの……。ましてこんな悪行の限りを尽くしている取り立て屋のバートには敵がいっぱい。遂にある日バートは……？

## この映画のポイントはピアノ、そしてスパイスはモーツァルトのピアノソナタ

飼い主に忠実な闘犬という存在のダニーだったが、人間のDNAとはすごいもの……。？ 闘うマシンとなっているダニーは肉体的にはもちろん立派な大人だが、10歳程度の知能しか持っておらず、牢獄のような地下室で見る本はアルファベットを解説した1冊の絵本のみ。その絵本のPのページには代表例としてPIANOと書かれ、ピアノの絵が。そしてなぜか闘うマシンとなっているダニーはこのピアノの絵が大好きで、毎日この絵を眺めていた。そしてそれには、あっと驚く秘密が……？

ところで君は、モーツァルトの『ピアノソナタ11番』を知っているだろうか……。？ 美しくゆったりと流れるこのメロディが私は大スキで、曲のイメージをバッチリと把握しているが、この曲がこのアクション映画の中で重要なスパイスの役を果たすことに……。

2005(平成17)年7月4日記